

The Image of Reikeiden-Nyogo
in "*Wagamini-tadoru-himegimi*"

TAKEHISA Yasutaka

BULLETIN OF THE
FACULTY OF EDUCATION, KOCHI UNIVERSITY No.74 2014
KOCHI, JAPAN

『高知大学教育学部研究報告』第七四号
二〇一四年三月 発行 抜刷

『我身にたどる姫君』の麗景殿女御考

武久康高

論
文

The Image of Reikeiden-Nyogo
in "*Wagamini-tadoru-himegimi*"

TAKEHISA Yasutaka

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

This paper consider the person image of Reikeiden-Nyogo who is characters of "*Wagamini-tadoru-himegimi*".

『我身にたどる姫君』の麗景殿女御考

武久
康高（高知大学教育学部）

一

中世王朝物語の一つである『我身にたどる姫君』は、巻頭から巻八の最後まで「実に四十五年間にわたり、御代は七代に及び、登場人物も夥しい数に上る」、非常に「大規模な作品である」¹⁾。こうした長編の物語『我身にたどる姫君』について今井源衛は、「男女の不思議なつながり」による「非条理的な恋愛、あるいは性愛の諸相」が「女性の立場」から描かれているところにその特徴を見、「女が女の心を、また肉体を、ここまであらわに書き記したものは古典作品としては他に例がないだろう」と評している。²⁾さらに辛島正雄は、『夜の寝覚』が開拓した（女の物語）の方法を、鎌倉期に好まれたいわゆる（歴史物語的手法）とドッキングさせた「（女の物語）ならぬ（私たちの物語）」ともいうべきもの」と述べ³⁾、本物語の特徴を論じるには「（女）をいかに描き出そうとしたかということ」を抜きにしては考えがたし、いと指摘している。⁴⁾

確かに『我身にたどる姫君』には、聖代を築いた明主である女帝やエキセントリックな言動が目立つ前斎宮、皇后宮や中宮（水尾女院）の血統の女性など個性豊かな女たちが登場する。そのため、彼女らの描かれ方——それぞれの人物像や本物語における「女系」（血の繋がりのある女性の系譜）の意味性など——の分析を通して、作品の特徴やその表現性を探る研究がこれまでなされてきた。例えば小島明子は、遺伝による「美貌の酷似」が特徴である「皇后宮の女系」について、彼女たちはその美貌で「男性の心を悩まさずにはいられない」一方で、「自分自身をも苦惱させ、苛まらずにはいられない宿命」を持った存在であるとす。そしてそんな彼女たちを通じて本物語では、「女の生きがたさ」というものが描き出されると指摘している。⁵⁾この論は、本物語における「女系」の意味性——①「この物語の登場人物、特に女性」は「その容貌および性格が祖母—母—娘と継承されてゆく」⁶⁾。という特徴があること、②それぞれの女系（皇后宮系・中宮（水尾女院）系・北政所系）の持つ特色や女系相互の関係性の理解が『我身にたどる姫君』の構造を把握するのに有効であること⁷⁾——をもとに、「皇后宮の女系」がいかに描き出されているのか明らかにすることで、『我身にたどる姫君』の表現性について論じたものである。このように従来の研究では、本物語の特徴やその表現性を考察する方法の一つとして、物語上での「女の描かれ方」（「女系」の持つ意味性や人物像など）が分析されてきたのであった。

以下、本稿でも先行研究に倣い、麗景殿女御という女性を分析することによって、本物語の特徴の一端を明らかにしたい。だが麗景殿は、本物語の主要女性登場人物のなかでは例外的に、母ではなく父の特徴を受け継いだ人物として造型されており、

女の描かれ方⁸⁾を論じる多くの研究のような手法（女系による整理・考察）は使えない。そのため麗景殿は、今までの研究においてメインで論じられることがほとんどなかった人物である。だが彼女は、『我身にたどる姫君』の中では十分に個性的な女として描き出されている（一例を挙げれば、彼女は非常に美しく聡明で、誰よりも早く東宮（のちの三条帝）に入内しながらもそれほど愛されず、そのためか兄の親友と不倫し子どもまでなしてしまふ）。こうした主要な女系には属さないが個性的な女性がいかに描かれているのか、これを分析することは（私たちの物語）と評される本物語の表現性を考える上で必要な作業となるであろう。よって以下、考察をすすめたい。

二

本稿で考察する麗景殿の父・式部卿宮は皇后宮の二宮である。二宮は「御かたちをはじめ、いづれとなく生ひ出で給ふなかに、（引用者注—皇后宮腹ノ）二の皇子・女三の皇子の御光にはならび給ふ人ぞなかりける」（巻一・二〇頁）とされるように、男性では皇后宮の「御光」をただ一人受け継ぐ、まさに主人公級の人物であった。だがそんな二宮の娘・麗景殿は、「かたちいみじくめでたくおはする」（巻四・一八〇頁）とは評されるものの、皇后宮に連なる「御光」は受け継いでいないようである。

前述したように本物語では、「祖母—母—娘」のラインで「容貌および性格」が継承される傾向にある。ここでも皇后宮の娘（女三宮、我身姫）の娘（後涼殿・一品宮・女二宮）については、「ただ同じ御光の並び給へる」とか「いとせめて母に似給ひける族にて、いづれもかうたぐひなく人をも悩まし給ふなるべし」（巻四・一九〇頁）など、「母に似給ひける族」として「御光」の継承が語られる。だが皇后宮の息子（二宮）の娘である麗景殿に関しては「御光」の継承が語られず、さらに「たぐひなく人をも悩まし給ふ」といった皇后宮の「族」が担う性質も、「御族の女」に比べて強くないようである。

すべて御族の女と聞こゆるかぎり、けしからず見染めつる人をまどはし給ひければ、（引用者注—東宮ハ女三宮ノ姫君以外）ここととも思したらぬに、やうやう漏り出でざらぬやは。（巻四・一八六頁）

「御族の女」である女三宮の娘（後の後涼殿）と密通の後、東宮は彼女に夢中になつてしまふ。引用箇所ではそんな男を虜にする様子が「すべて御族の女と聞こゆるかぎり、けしからず見染めつる人をまどはし給ひければ」と説明されている。「魔性の女」とでも形容したくなる「御族の女」の持つ魅力であるが、注意すべきはこの時すでに、

東宮には麗景殿が入内していたということである。つまり麗景殿は、自分の夫である東宮の心を「御族の女」に奪われてしまう女なのである。事実、その後も麗景殿に対する東宮の愛情はさほど強くなく、「引用者注→後涼殿へ」めざましき御おぼえを、麗景殿の御心のうち折につけてもいかばかりかと思ひやりつる」(巻四・二〇七頁)であるとか、「中の劣りの宮の女御」(巻七・一三八頁)などと評される始末であった。このように麗景殿は、皇后宮の孫でありながらその「族」には連ならない女である。しかしその代わりに彼女は父の性質、とりわけ「いといたう色めきすぎ」る性質を受け継ぐ娘として描き出されている。

麗景殿も、父宮の御流れにやいといたう色めきすぎで、あまり艶に染みかへり給へるさまこそ、うちとけて人見えにくきまで、帝と聞こゆれど御心遣ひこよなけれ。(巻四・二〇三頁)

父・式部卿宮の同腹兄は嵯峨帝、異腹弟は我身帝である。そのため当然、二宮である式部卿宮にも立坊のチャンスはあった。だが彼は「徒名のみ立ちはてて」しまったため、「坊に据多聞こえむといふ人」が存在しなかったのである。こうした父の色好みな性質は、「いといたう色めきすぎで、あまり艶に染みかへり給へる」麗景殿にも当てはまるとともに、麗景殿と容貌が「いとよく覚えたる」兄・右大臣にも受け継がれている。一例を挙げれば、「こなたかなたとあくがれ給ふ」色好みの右大臣は、一品宮に思いを寄せながらも帝が寵愛する後涼殿と関係を持ってしまふ。そして両者への叶わぬ恋に身を焦がし続けた右大臣は、とうとう「まことにほれぼれしく」なってしまう。こうした色好みの顛末は、「あまりけしからざりし御忍び歩きの果て果ては、えもいはぬ聖になりて、ひとり寝をのみし給ふさま、なほこの方にももの狂ほしき御さまなり」(巻三・一二五頁)などと評された、若かりし頃の父・式部卿宮の姿と共通していると言える。つまり、父・式部卿宮の「色を好む」性質は、麗景殿とともに右大臣にも継承されているのである。

以上のように、父の特徴を受け継ぐ人物として麗景殿と右大臣は描かれている。このうち麗景殿のエピソードは兄・右大臣の話に続けて語られることが多く、そこで麗景殿は「この御妹」(巻四・一八〇頁)、「御妹の女御の君」(巻五・四〇頁)、「この御妹の女御の御上」(巻七・一四六頁)などと呼ばれている。おそらくこうした語り口は、麗景殿のエピソードを直前の兄の語りに関連させつつ読ませるための仕掛けと捉えられよう。そこで次節では、この両者が並べられて語られている箇所を分析し、麗景殿と右大臣の描かれ方について考察したい。

三

まずは麗景殿がはじめて登場する場面を引用し、その基本的な描かれ方を確認する。宮の中將と聞こゆるは、院の一つ后腹に、いといたう色めきすぎで聞こえ給ひし、今の式部卿の宮とて、おぼえやむごとなくものし給ひしが、同じ皇女たち前の齋宮に住み奉り給ふ腹になむ。この御妹、東宮に参り給ひしが、かたぢいみじくめでたくおはするが、御心やいかが。されど、あさき方にはあらで、例のいかなる御心あやまりにか、心交はし給ふ人もあるべし。すべて例よきこととたづね出で給ふにや。(巻四・一八〇頁)

麗景殿の初出は、兄(ここでは宮の中將)の家族紹介においてである。巻一から巻三に登場した「いといたう色めきすぎ」る二宮を父に、皇女である前齋宮を母に持つ麗景殿は、その血筋の良さや式部卿宮娘といった世間の信望をもとに東宮に入内しているのだが、「いかなる御心あやまりにか」、東宮以外の男とみずから心を交わしているという。このように初登場の場面から、前節で確認したような父の特徴を受け継ぐ好色な人物として麗景殿は描き出されているのである。

では、こうした「色めきすぎ」る女・麗景殿はその後、どのように語られていくのだろうか。前述したように麗景殿とその兄・右大臣は容姿が似ており、さらに父譲りの色好みであるという点も共通している。以下、そうした似た者同士の兄妹が並列して語られている箇所【1】〜【4】を取り上げ、両者の描かれ方を分析したい。

【1】

一品宮に恋い焦がれる兄・右大臣は、一品宮の乳母である大式の君に「身に添ふ影」のように「立ち添ひ給へれど」、宮と関係を持つことができないでいる。「時雨れゆく長月」の夜も右大臣は「いと忍びて」戸を叩くのだが、大式の君の応対はなく、彼はむなしく帰るしかなかった。しかしその道すがら、思いがけず後涼殿のもとに忍び込み、契りを結んでしまうのであった。以下、忍び込むまでの場面を引用しよう。

やをら藤壺のうちを通りて後涼殿の西さまに出で給ふに、蔵人町の屋の方に人々随人どもなどあまたあるけはひすれば、いといたう忍びたる姿も見えじと、しばしやすらひて馬道のほどに立ちとまり給へるに、あまりひまなき御けしきに今は思ひ絶えにしすぢなれど、なほ事のりをりふしに心動かずもあらぬを、ものけしき見つべうやと立ち聞き給へば、いと若きはひにて、「降るとも雨に」と口ずさびて出づるを、ことしもあれ何ことをとをかしうて、やをら細り立ちたれば、

思ひ分かず曹司に下りぬるなるべし。

（巻四・二〇四頁）

右大臣は帝の寵妃・後涼殿に対する思いをすであきらめていた。そのためこの度も「ものけしき見つべうや」と軽い気持ちで後涼殿の戸を「すこし押し開けて」みたにすぎなかったのである。ここからは、『源氏物語』の柏木のような「抑えきれない激情」から始まる密通」とは異なる密通の始まりが見て取れよう。だがこの密通はその後、「世にながらへむ」とも右大臣に思わせないほど、その心を苦しめることになるのであった。

さて、以上のような兄の密通の後に描かれるのが、左大将と麗景殿との密会である。

とかくたばかりて、ただ夢ばかりなる御けはひ、いひ知らず心深き御仲らひには、何ごとをかまねび出でむ。女も世をいといたう思ひ乱れ給へるほどぞ心苦しきや。かかる夢のまよひに尽くす御心はかぎりなめれど、げにこれを終の寄るべと定めむとしも、あらましことまでは思し寄らぬをも、女はいかでかさも心得給はむ。ましてうちとけず、艶なる御けはひ千代を一夜にてもあくまじきを、あやにくにするき御身のほどを思すにも、ゆきあふ坂に夜を通さむことはわづらはしうて、急ぎ出で給ふほどいみじうなかなかなり。

関守の通さぬ夜半と知りながらなほまどはる逢坂の山

心からうき逢坂の関守は涙のみこそとどめざりけれ

御供の人などもとかくまぎらはし給へれば、とがめ聞こゆる人しもなければ、十二日の月の入り方になりけるを、そらおそろしうぞながめられ給ふ。

（巻四・二〇七頁）

内裏を訪れるも帝と会えなかつた殿の左大将は、その帰りに麗景殿と夢のような逢瀬を持つ。だがこうした逢瀬を重ねながらも左大将は、麗景殿を「終の寄るべ」とまでは考えておらず、そんな男の思いについて麗景殿は知る由もなかった。ちなみに他の部分でも左大将は、麗景殿との関係について「身を尽くすばかりにはあらねど」（巻四・一八三頁）と評しており、彼にとつて麗景殿との関係とは、将来を見据え「身を尽くす」程のものではなかったことが窺える。

一方、麗景殿はどうだろうか。二人の関係について「思ひ乱れ」る麗景殿は、夜を明かさず「急ぎ出で給ふ」男に対して、「心からうき逢坂の関守は涙のみこそとどめざりけれ」という歌を詠む。歌中にある「心から」とは、「心からかたがた袖を濡らすかなあくとしふる声につけても」（源氏物語・賢木・朧月夜）や「たえはつる人やはつらき心から名さへうらめし逢坂の関」（水無瀬恋十五首歌合・五三番右・関路

恋・宮内卿）という用例もあるように、ここでは「自分の心が原因で」といった意味であろう。つまり麗景殿は、「こうしたつらい逢瀬も、我が心からしたことではあるけれど」¹⁰と和歌前半部分で歌っているわけであり、ここからは彼女の方が左大将との逢瀬に積極的であることが窺える。

以上、【1】の部分における兄・右大臣と麗景殿のエピソードは、それぞれ「身を尽くす」ほどの執着を持って密通を行ったとは言い難い男とそこで女の姿が描かれている。このうち右大臣は「一度逢ってしまったがために、その後逢えない苦しみに陥る男」として、また麗景殿は「自分のほうが逢瀬に積極的だが、男から「終の寄るべ」として選ばれない女」として語られていると言えよう。

【2】

次に右大臣と麗景殿とが並んで描かれるのは、密通の相手と逢えない様子が語られる場面である。

権中納言は、禊うけ給ふ神もなきままにまことにほればしうのみなりまざるを、内にも久しく召しなどもなければ、そこはかとなく思ひ結ばほれて明かし暮らし給へど、新しき年さへすずろに籠りものし給ふべきならねば、節会などに立ち出で給ふにも、去らぬ面影のみ思ひわび給ひにたり。

大将も、うち続きまぎれしほどに、細殿の旅寝にだにかき絶えて、いとど慰む方なく思ひ乱れ給ふ。

新玉の年さへあらず変はるまで見しよの夢は隔たりにけり

ひたすらに夢になしても止みなむ年も心も変はり果てなば

とあるを、久しかりつる絶え間にやいと恋しう思す。（巻四・二二二頁）

ここで兄（ここでは権中納言）は、後涼殿の「面影」が身を離れぬことに苦しめられ、「まことにほればしうのみ」なるばかりであった。一方で麗景殿は、相手の「心」が「変はり果て」るのなら逢瀬を「夢になして」終わってしまいたい、という歌を詠んでいる。ここでは「密通の相手と逢えない」という同じような状況のなかで、「ほればしうくなる兄」と「関係性の変化も辞さない麗景殿」といった対照的な言動をとる男女の様子が語られていると言えよう。

【3】

後涼殿に逢えないことに加え、父である式部卿宮も亡くなってしまい、兄・右大臣はますます憔悴する。そこで後涼殿の住む三条院に向いてみるものの、彼女の姿を見ることはできない。しかしその代わりに憧れていた一品宮の姿を見、右大臣は「た

だ今死ぬる心地」がするのであった。

〔引用者注―後涼殿ノ〕け近かりし名残のかなしさにや、よその思ひはおのづからたゆまれつるを、取り返し燃え尽きぬる心地ぞする。ただこもとに人の音してあまた来なるに、そらおそろしう立ち出づるほど、生ける心地もせず。

また添へてあと枕より責めよと思ひに死なぬ命なりけれ(巻五・三四頁)
 後涼殿との逢瀬により「おのづからたゆまれつる」一品宮への思いが再燃した右大臣は、その思いを歌―大意は「後涼殿への思いの上に一品宮への思いが加わり、その両者への物思いのために死ぬことはないのだろうか」というもの―にしている。その後、性懲りもなく大式の君に取り次ぎを依頼するも、そこで彼は自分に対する一品宮の「たぐひなく心憂かりける御心のほど」を思い知ることとなる。このように右大臣は、両女性(後涼殿と一品宮)への実現性のない思いに心を砕く男としてここでは語られている。

では一方で、妹である麗景殿はどのように語られているのだろうか。

御妹の女御の君は、まして久しき御里住みのほどに、いふ方なきもの思ひさへ添ひ給へる御心のうち、さらにたとへむ方なし。昔の御内住みのほどなどは、御心もむげに若う、まだ片なりとも聞こえつべかりしほどに、少しはいふかひなきこともうち交じり、ひとへに艶に消え返りたるすぢのみ好まじうおはしけるに、たぐひなき志のほど、まことに逢ふには身をかふばかり思ひまどへる人の御けしきを見給ひしに、身も滅びぬべく、御手洗川の禊も、ただ我が御上ののみ思ひ知られ給ひけるほどは、いふかひなき細殿の心尽くしも絶え間久しからず、同じ心なりけるを、やうやうものの心付き、我れもおとなおとなしき心添ひ給ふままに、また、「人の御志も、思ひそめしままならば、ただ今の空のけしきは」など、もの恨めしき時々もたび重なりけるに、いみじうもの思ひ取り給ひけるころの癖にて、ただあはあはしう行く手のすさびなどにはうちなびくばかりの心は、さらに思しかげざりければ、いみじうつれなくのみ生ひなり給へるを、さすがに忘れがたく聞こえ悩まし給ふをも、かたへはめざましとのみ思ひなり給へるを、

(巻五・四〇頁)

男の訪れがない長期間の里住まいは、麗景殿に「いふ方なきもの思ひ」とともに「おとなおとなしき心」をもたらしした。ここでは「昔の御内住み」の頃の私―「逢ふには身をかふばかり思ひまどへる人」との「身も滅」ぼすような恋」を好んでいた私―が見つめ直され、さらに左大将の「御志」の変化が実感されたことで、昔のよう

な「あはあはしう行く手のすさびなどにうちなびく」気持ち喪失したという訳である。ちなみに、こうした恋人・左大将に対する麗景殿の変化について本文では、「いみじうつれなくのみ生ひなり給へる」と「生ひなる」(「…の状態に」成長する。育つ)という言葉で表現している。つまりここでの麗景殿の変化は、過去を見つめ直し、男に振り回されることをやめた彼女の「成長」として語られているのである。

こうしたなか、麗景殿に懐妊の事実が判明する。しかし出産までのすべてを彼女は母や兄、夫である三条院、そして子どもと父である左大将にも知らせることなく、たった一人でやりとげてしまう。通常、秘密にすべき子どもを女性が身ごもった場合、王朝物語では妊婦の母や乳母、女房たちの活躍により出産にいたることが多い。しかしここでは、彼女の母は妊娠の事実を知らず、女房たちの活躍についても言及されていない。つまり、麗景殿一人ですべてを行ったかのように語られているのである。

さらに出産後、麗景殿は子どもを知り合いから迎えた養女ということにし、女一宮(三条院と麗景殿の子)の「たぐひ」として宮中で世話することとする。その際の麗景殿の行動は次のとおりである。

よきほどに御色改まれば、御乳などいみじうしぼり捨てて、いとうつくしうひき装束きて、院に入らせ給ひにけり。雲居の月、安積の沼の、あまりさま悪しきこそ御心も分けられね、なほ世の人にはたぐひなくまさり給へるを、いかがあはれと御覽せざらむ。姫宮に御琴など教へ聞こえさせ給ひて、またいとくちをしからず渡らせ給ふ。

(巻五・四二頁)

ちようどよい頃合に父の裳が明けたため、麗景殿は御乳を「しぼり捨て」、美しく着飾って三条院に参る。そこで彼女は、女帝や後涼殿のように「あまりさま悪しき」ままで寵愛を受けている女君にこそかなわぬが、それなりに院から愛されるのであった。ところで、こうした「三条院に参る」という行動からは、彼女の心境の変化が窺える。というのも麗景殿は、これまで様々な理由をつけて里に籠もっていたからである。

・宮の女御のみぞ世のなかを思し乱れて、よろづ人笑へに思さるれば、女宮おはしませばそれに心慰めて、里にぞ籠りおはする。

(巻四・二二六頁)

・宮の女御は、さしも心強き御心ならねど、いとかう、うげばりたりし御方々にだによそよそなるに、一人しも競ひ参り給はむに、そぞろはしきにや、ただ背き背きにひとり寝し給ふ所ぞ多かる。

(巻五・二〇頁)

一つ目の引用からは、「世のなか」のことで思い乱れた彼女は、女一宮とともに里に籠っていたということが分かる。また二つ目の引用からは、それほど「心強き御心」

ではない彼女は、自分一人だけが後涼殿と競うように三条院に参るのは気が引けていた、ということが分かる。

では、こうした「心強き御心」を持たなかった麗景殿が、子どもたちを連れて三条院に参る理由とはなんだろうか。おそらくそこにあるのは、これまでのように「艶に消え返る」「あはあはし」き恋を求めることや三条院の寵愛を後涼殿たちと争うことをやめ、女一宮と養女扱いの女二宮のため、彼女らの「母」として三条院で生きていくことを決めた「強き御心」の存在である。父・式部卿宮の特徴を受け継ぎ、恋愛に生きる好色な人物として造型されていた麗景殿は、ここにきて大きく「成長」しているのである。

このように【3】の部分では、後涼殿と一品宮に対する発展性のない恋に心を砕く「まことにあぢきなき」兄の様子が語られた後、そうした不毛な恋を終わりにし、「母」として生きていこうとする妹・麗景殿の姿が描き出されている。そしてその麗景殿パーストの末尾は、以下のような文で締め括られている。

ただ右大将のみぞ尽きせずながめまざり給ふ。

（巻五・四三頁）

この右大将とは兄・右大臣のことである。やはり本物語は、麗景殿と兄・右大臣の語りを関連させ、「色好み」である兄妹の対照的な生き方を浮かび上がらせていると言えよう。

【4】物語ではその後、女帝が退位し悲恋帝が即位する。しかしこのように御代が変わっても、右大臣の様子は相変わらずであった。

その四月、殿、太政大臣辞せさせ給ひて、女御の父おとど、太政大臣に上がり給ふ。右大将、右大臣に、左大将、左大将になり給ひぬ。秋風の騒ぎには、片

時もうつつの人にて行き廻らむとも思しかげざりしかど、かばかりまでなり給ひぬるも、思ひのほかにはぞ御みづから思し知らるる。

（巻七・一四六頁）

「秋風の騒ぎ」とは、【1】で取り上げた後涼殿との出来事をさす。その一件以来、「物思いのゆえに生きていけない」と思いつつも生きながらえたことに右大臣は驚くのであった。

一方、麗景殿はどのように描かれているのだろうか。

さて、この御妹の女御の御上を、例の、あやしきもの忘れの人は落としてけり。（中略）あまり好み過ぎ給へるこそ、女御の御とがには聞こえしかど、心おくれせず、ものの折ふしなどは人よりことにわきまへ思したれば、先帝の御

嘆きのまぎれに、中宮だに移るふ菊恨み給ひしころは、御心地なやましとて、古里にまかり出で給へりし、行幸など過ぎてぞ、また入り給ひにし。この姫君もいとうつくしう生ひ出で給へるを、院はならばめづらしき御有様を、わたくしものいとかなしう思ひ聞こえさせ給へり。

（巻七・一四六頁）

引用箇所の前半では、麗景殿の「あまり好み過ぎ」す性質に焦点が当てられている。これまで彼女が持つ「あまり好み過ぎ」す性質については、その「色好み」側面が中心に取り上げられてきた。しかしここでは、この性質が担う「色好み」以外の側面、つまり「心おくれ」しないこと、「ものの折ふし」を「人よりことにわきまへ」ること²が麗景殿の美質として取り上げられているのである（女帝が亡くなって悲嘆にくれる院に対して、後涼殿は「院は自分に冷たい」と恨み言を述べるのだが、院の気持ちを考える麗景殿は「気分が悪い」と里に戻る。三条院の寵愛をめぐる争いからも降り、まさに「父譲りの「色好み」」以外の魅力を備えた女性としてここで語られている）。また引用の後半では、姫君が院に溺愛されている様子（院はならばめづらしき御有様を、わたくしものいとかなしう思ひ聞こえさせ給へり）が語られている。【3】でも言及したように麗景殿は、院に溺愛される姫君の「母」として語られるようになるのである。

このような麗景殿の語りの直後に、物語では右大臣の現状が再度語られている。

右の大臣は、心よりほかに長らへ給へれど、ただ昔の中將の御住まひながら、夜としなれば月のみあくがれ、昼はものいはぬ文机ばかりに向かひてうち眠りつつ明かし暮らし給ふ。ことの欠くるところは、太政大臣殿の御けしきばみ給へど、かけても思しよらざりき。

天つ空見えし月日の色ならで袖にけ近き影はならさじ

かぎりなの痴れ言や。左の大臣の御ひとり住みのほどは、「露をあはれ」とも、いとよく思ひやられしを、あやにくにかぎりなき御もてなしに、さこそいへ、思ふことなげなるけしきを見給ふにも、我れのみ焦がれまざり給ふ。

（巻七・一四七頁）

右大臣という要職に付きながらも、「夜」は「月にのみあくがれ」、「昼はものいはぬ文机」で「うち眠りつつ明かし暮ら」す兄。和歌（天つ空見えし月日の色ならで袖にけ近き影はならさじ）から窺える「一品宮や後涼殿クラスの女性でない」と結婚するつもりはない³という思いは、語り手からも「かぎりなの痴れ言」と酷評される始末であった。

「色好み」以外の魅力を發揮しつつ「母」として三条院で生きていく麗景殿と、「色好み」的世界に入り込み、現実が見つめられない兄。父譲りの色好みという性質を受け継いだ兄妹は、本物語を通じてこのように対照的な生き方を見せていくのであった。

四

以上、兄・右大臣との対比を通じて麗景殿の描かれ方を考察した。ここでそのまゝめに入る前に、もう一つ別の観点から麗景殿の人物像を検討しておきたい。

麗景殿に関する語りをみていると、そこには『源氏物語』の麗月夜との重なりが散見される。例えば、両者ともに帝の妻でありながら恋人と関係を持つという点がある。以下、列挙してみよう。

【容貌よし】

《麗月夜》なまめかしよう容貌よき女の例には、なほひき出でつべき人ぞかし。

(朝顔)

《麗景殿》この御妹、東宮に参り給ひしが、かたちいみじくめでたくおはするが、御心やいかが。(巻四・一八〇頁)

【艶】

《麗月夜》「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」と言ふ

さま、艶になまめきたり。(花宴)

《麗景殿》麗景殿も、父宮の御流れにやいといたう色めきすぎで、あまり艶に染みかへり給へるさまこそ、うちとけて人見えにくきまで、帝と聞こゆれど御心遣ひこよなけれ。(巻四・二〇三頁)

・ひとへに艶に消え返りたるすぢのみ好ましようおはしけるに(巻五・四〇頁)

【重々しいところなし】

《麗月夜》女の御さまもげにぞめでたき御盛りなる、重りかなる方はいかがあらむ、をかしようなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。(賢木)

・もとよりづしやかなるところはおはせざりし人の、年ころはさまさまに世の中を思ひ知り、来し方をくやししく、公私のことにふれつつ、数もななく思しあつめて、いといたく過ぐしたまひにたれど、昔おぼえたる御対面に、その世の事も遠からぬ心地して、え心強くもてなしたまはず。

(若菜上)

※今井源衛・春秋会による指摘あり

《麗景殿》耳きく人もこそあれ、と、女御はわびしくやおはしけむ。もとより重くは

あらざりしかば、おほかたの空の見過ぐしがたきさまにぞ、さぶらふ人は心付けむかし。(巻八・一九八頁)

◇以上は容貌および性質に関する項目である。その美しさや艶で色めかしい性質が両者には共通していると言えよう。

【細殿II逢瀬の場所】

《麗月夜》弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。(中略)「麗月夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。(花宴)

・例の夢のやうに聞こえたまふ。かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れたてまつる。(賢木)

《麗景殿》麗景殿の細殿わたり、例のほめき給ふに、(巻四・二〇七頁)

・大将も、うち続きまぎれしほどに、細殿の旅寝にだにかき絶えて、いとど慰む方なく思ひ乱れ給ふ。(巻四・二二二頁)

・昔の御内住みのほどなどは、(中略)いふかひなき細殿の心尽くしも絶え間久しからず、同じ心なりけるを(巻五・四〇頁)

【恋愛に対する男女の温度差】

《麗月夜》御匣殿なほこの大将にのみ心つけたまへるを、(中略)君も、おしなべ

てのさまにはおぼえざりしを、口惜しとは思せど、ただ今は(引用者注―紫ノ上以外ノ)異さまに分くる御心もなくて、何か、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ、人の恨みも負ふまじかりけり、といとどあやふく思し懲りにたり。(葵)

《麗景殿》とかくたばかりて、ただ夢ばかりなる御けはひ、いひ知らず心深き御仲らひには、何ごとをかたまねび出でむ。女も世をいという思ひ乱れ給へるほどぞ心苦しきや。(引用者注―男ハ)かかる夢のまよひに尽くす御心は

かぎりななめれど、げにこれを終の寄るべと定めむとしも、あらまじことまでは思し寄らぬをも、女はいかでかさも心得給はむ。(巻四・二〇七頁)

・左大将は、都鳥の跡絶えにし後、晴るけやる方なくて、いとあはれと思ひ出で聞こえ給へど、(引用者注―妻デアル)女宮の御さまのねびまさり給ふには、何の御心かは分けられむ。(巻五・四〇頁)

◇両者ともに宮中の細殿が逢瀬の場所である。そして、その不倫の恋に女はのめり込

むものの、男は自分の妻の方をより愛する。その点でも両者は共通している。その他、両者には和歌の表現が一致するなどの共通点もある¹²⁾。

このように共通点を列挙してみると、前節までに確認した「色めきすぎ」る女・麗景殿の語りには麗月夜の人物像が影響していると考えられそうである。そして前節【3】【4】で指摘したような麗景殿の「成長」も、おそらく「濡標」巻以降の麗月夜の変化を踏まえて語られていると考えられる。次に引用するのは、讓位を決意した朱雀帝が麗月夜に語る場面である。

（引用者注—朱雀院ハ）「なか御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人のためには、いま見出でたまひてむと思ふも口惜しや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」など、行く末のことをさへのためはするに、いと恥づかしうも悲しうもおぼえたまふ。御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月にそふやうにもてなさせたまふに、（引用者注—源氏ハ）めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなど、もの思ひ知られたまふまに、などてわが名の若くいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへ引き出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへ、など思し出づるにいとくき御身なり。

多くの人を傷つけた一連の「騒ぎ」について麗月夜は、自らの「若くいはけなき」心¹³⁾が原因だと考える。そのため彼女は、自らに対する「うき身」の思いを強くするのであった。そしてそんな「若くいはけなき」心「ゆえの恋を冷静に見つめ直していくなかで、自分に対する朱雀帝の長年の思い（年月にそふやうにもてなさせたまふ）「限りなき御心ざし」を理解し、その一方で、実はそれほど自分のことを愛していなかった源氏の「気色」や「心ばへ」を思い知るようになる。つまりここにきて麗月夜は、源氏のこととして朱雀帝のことを客観的に捉えられるようになったのである。では、これを踏まえて語られたと思しい麗景殿の「成長」は、一体どのように語られているのだろうか。再度、【3】で引用した本文を載せてみよう。

御妹の女御の君は、まして久しき御里住みのほどに、いふ方なきもの思ひさへ添ひ給へる御心のうち、さらにたとへむ方なし。昔の御内住みのほどなどは、御心もむげに若う、まだ片なりとも聞こえつべかりしほどに、少しはいふかひなきこともうち交じり、ひとへに艶に消え返りたるすぢのみ好ましうおはしけるに、たぐひなき志のほど、まことに逢ふには身をかふばかり思ひまどへる人の御けしきを見給ひしに、身も滅びぬべく、御手洗川の禊も、ただ我が御上に

のみ思ひ知られ給ひけるほどは、いふかひなき細殿の心尽くしも絶え間久しからず、同じ心なりけるを、やうやうものの心付き、我れもおとなおとしき心添ひ給ふまに、また、「人の御志も、思ひそめしままならば、ただ今の空のけしきは」など、もの恨めしき時々もたび重なりけるに、いみじうもの思ひ取り給ひけるころの癖にて、ただあはあはしう行く手のすさびなどにうちなびくばかりの心は、さらに思しかげざりければ、いみじうつれなくのみ生ひなり給へるを、さすがに忘れがたく聞こえ悩まし給ふをも、かたへはめざましとのみ思ひなり給へるを、

（巻五・四〇頁）
前述したようにここでは、「御心もむげに若」かった頃の自分（ひとへに艶に消え返りたる）恋のみを好んでいた自分が見つめ直され、さらに左大将の「御志」の変化が実感されたことで、昔のような「あはあはしう行く手のすさびなどにうちなびく」気持ち喪失したことが語られている。つまり麗月夜のように「御心もむげに若」かった頃の恋¹⁴⁾がここでは見つめ直されているのである。

しかし麗景殿が麗月夜と異なるのは、そうした過去の恋を見つめ直しても、「当時の恋人（左大将）は自分に対する愛情が薄かった」と気づかない点である。【1】でも言及したように、左大将の麗景殿に対する態度は「身を尽くす」程ではなく、彼女のことを「終の寄るべ」とまでは考えていなかった。しかし彼女はそのことに昔も今も気づかず、自分と彼とは当時「同じ心」だったと信じているのである。

ではなぜ麗月夜は源氏の本心に気づき、麗景殿は左大将の本心に気づかないのであろうか。稿者はその違いの発生には、「女君に対する帝の愛情の有無」が関連していると考えている。麗月夜は朱雀帝による長年の「限りなき御心ざし」を理解し、その対比で源氏の「さしも思ひたまへらざりし気色心ばへ」に気づいていく。一方、麗景殿には自分に限りない愛情を注いでくれる帝は存在しない（三条院の愛が自分には向いていないことを彼女は十分すぎるぐらいに知っている）。そのため彼女は左大将の本心に気づけないのである。

また麗月夜は、源氏との密通が朱雀帝を含め様々な人を傷つけたことを理解しており、その原因となった自分を「うき」者と思っている。だが一方で、麗景殿には左大将との密通が三条院を傷つけたという認識はない。そのため彼女は三条院に対する罪意識、および自分に対する「うき身」の意識を持たないのである。

では、以上のような両者の差異を通して浮かび上がる麗景殿の語りの特徴とは、一体どのようなものであろうか。両者の最大の違いは、自分のことを一番に愛してくれ

る男性（夫）の有無である。朧月夜にとつて、長年にわたつて自分に注いでくれた朱雀帝の愛を理解し受け止めることが、自らの過去の清算と大きく関わっていた。しかし麗景殿には、そうした自分だけに無償の愛を注いでくれる夫は存在しない。そんな彼女が選んだ生き方とは、過去の恋や自らの行為を「うき」と痛恨するのではなく、しかし昔のように、「色好み」な女として恋のときめきや寵愛のありかをめぐつて右往左往もしない生き方、つまりそれは前節で確認したような女君の「母」として生きていくことであつた。

『源氏物語』で描かれる朧月夜の物語とは、自由奔放だった女が年を重ねていくなかで過去を捉え返す、その過程で自らを「うき身」と自覚し、男たちの愛情の有無に気づいていくというものである。そしてこの朧月夜の人物像が参照されたと思しい麗景殿の物語も、自由奔放だった女が年を重ねるなかで過去を捉え返すという構造を共有している。しかしここでは、「うき身」の自覚や配偶者の苦悩に寄り添うことで分かる「真実の愛情」の存在は語られない。おそらくそれよりも麗景殿を通じて描きだされたのは、そうした過去の恋愛への悔恨や性愛を基盤とした夫との関係性に惑い続ける女の姿ではなく、それを軽やかに飛び越え、「母」としてたたかに生きていく女の姿であると言えよう。

五

金光桂子は『我身にたどる姫君』について、「人物の系譜などの点で史実を大幅に取り込み、しかもそれに改変を加えることによつて、いわば独自の虚構の歴史を描き出している」とし、例えば三条院の後宮は「后妃たちの構成の上で似通うところの大きい後朱雀後宮と後冷泉後宮を組み合わせたところに」成り立っていると指摘している¹³。確かに承香殿（女帝）や藤壺、後涼殿といった主要な女君たちは、金光がいうように「史実」に依拠して設定されたと思しい。だが、本稿で取り上げた麗景殿については、依拠したと思われる女君が後朱雀後宮と後冷泉後宮には存在しない。では、いったいなぜ麗景殿という人物が本物語に設定されたのだろうか。そのあたりの事情については、以下の辛島正雄の文章が参考になる¹⁴。

二人の秘密の子の誕生は、殿の左大臣と宮の右大臣という親友どうしを、非公式ながら、親族関係で結ぶことになる（中略）。すなわち、左大臣と右大臣の密通相手が互いの女きょうだいであることから、姫君たちは、父かたからも、母かたからも、従姉妹どうしなのである。そして、それぞれに、藤壺腹の二の宮（今

上）と三の宮（春宮）の兄弟（藤壺は、左大臣・後涼殿とは、同母ないし異母きょうだいであるから、これまた、姫君たちにとつていとこに当たる）と結婚、家柄からも、愛情からも、ほかの妃たちを圧倒している。将来は、いずれもが皇統を継ぐ可能性が大である。

かくて、水尾女院の直系によつてほとんど独占されてきた皇統に、不遇であつた皇后宮の二の宮や女三の宮の血統が、ようやく混じりはじめたわけであり、当初の「対立的関係」も解消し、融和的世界の出現に期待がかかるのである。

殿の左大将との密通の末に麗景殿が産んだ姫君は藤壺腹の二宮（今上）と結婚するが、それは「水尾女院の直系によつてほとんど独占されてきた皇統に、不遇であつた皇后宮の」「血統」が混ざること、「つまり物語の構造的には、皇后宮系と中宮系との「対立的関係」の解消と「融和的世界の出現」を意味する。そうした「理想的」な世界の創出に麗景殿および姫君は寄与しているのである。

このように麗景殿という登場人物が構想された背景には、物語の構造や構成に関わる要請があつたと考えられる。だが本稿で見えてきたように、麗景殿という女性性は、物語が「融和的世界の出現」といった大団円を迎えるためだけに造型されたと考えるにはあまりに個性的な女君である。我々はこの麗景殿の描かれ方の分析を通じて、「女たちの物語」とも評される『我身にたどる姫君』という作品が「〈女〉をいかに描き出そうとしたか」、その一端を知ることになるだろう。

本稿で確認したように、麗景殿と兄・右大臣とは「色好み」である父宮の特徴を受け継ぐ人物であり、麗景殿の様子は主として兄との対比を通じて描き出されていた。ここでは「色好み」的世界に入り込み現実が見つめられない兄・右大臣に対し、そうした不毛な恋から抜け出し、「母」として「色好み」以外の魅力を發揮しつつ生きていく妹・麗景殿の姿が指摘できた。

また、麗景殿の語りには朧月夜の人物像も影響していた。両者は「色好み」の女が年を重ねるなかで自らの過去を捉え返していく」という構造を共有している。しかし麗景殿の場合、朧月夜の物語が問題化していた「後悔からくる「うき身」の自覚」や「配偶者の苦悩に寄り添うことで愛の存在に気づく女の姿」は語られない。麗景殿を通じて描き出されているのは、そうした過去の恋愛への悔恨や「真実の愛」への目覚めなどではなく、そんな性愛を基盤とした男女の関係性に右往左往しないような生き方を選ぶ女の姿であつた。

以上、本稿では『我身にたどる姫君』の主要な女君の一人である麗景殿に焦点をあ

てて考察を行った。今後もこのように『我身にたどる姫君』の女君たちの分析を続けることによって、本物語の表現性について検討していきたい。

*本文の引用は、中世王朝物語全集『我が身にたどる姫君・上』『同・下』（笠間書院）、新日本古典文学全集『源氏物語一』『同二』『同四』（小学館）によった。

注

- 1 金子武雄「わが身にたどる姫君の研究」(『物語文学の研究—本文と論考—』笠間書院、一九七四)。
- 2 今井源衛『我身にたどる姫君』論(一)「概説」(『王朝末期物語論』桜楓社、一九八六)。
- 3 辛島正雄『我身にたどる姫君』の女帝(その一)—物語史上の位置』(『中世王朝物語史論 上巻』笠間書院、二〇〇一)。
- 4 辛島正雄「(女の物語)としての『我身にたどる姫君』」(辛島注3書)。
- 5 小島明子『我身にたどる姫君』皇后宮の女系考—一品宮の問題を軸に—(『中世宮廷物語文学の研究—歴史との往還—』和泉書院、二〇一〇)。
- 6 小島明子『我身にたどる姫君』の女帝像—女性往生者の投影—(小島注5書)。
- 7 辛島正雄は「はじめは対立的関係にあった皇室系と摂関家系」による「血統」の融合」という本物語の「基本構造」を受け、その「対立的関係」の中心には三代にわたる二組の女性の系譜(「皇后宮—女三の宮—後涼殿—対「中宮(水尾女院)—女四の宮—藤壺」が存在することを指摘している(『我身にたどる姫君』における二つの女系「辛島注3書」)。また生澤喜美恵は、「美貌の皇后宮系、子孫を繁栄に導く水尾女院系、「心うつくしき」北政所系」といった、対立関係にない三組の女系が縋り合い融合していく物語世界が本作品では描かれていると論じている(『女帝実現の物語としての『我身にたどる姫君』』『池坊短期大学紀要』二七号、一九九七)。
- 8 一方で麗景殿も、「いとやむごとなき方には、院たちもおろかならず思ひ聞こえさせ給」う式部卿宮の娘として「人よりさきに」東宮に入内しているにも関わらず、立后されることはなかった。式部卿宮と麗景殿の親子は、可能性がありながらも帝や后という地位につけなかったという共通点がある。
- 9 「すべて例よきこととたづね出で給ふにや」に関して、今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君3』(桜楓社、一九八三)は「すべて、先例のあるのは良い事だという事にして、探し出されたものなのだろうか」と訳し、「不倫の物語は、業平・光源氏などに多いが、それは浪漫的で人々に愛好されたことをふまえてこういうのであろうか」とする。つまり、先例にかなうものとして麗景殿が不倫相手を探し出したと解釈しているのである。その一方で徳満澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』(有精堂、一九八〇)は「すべて先例にかなうものとして、東宮の配偶者に宮の中將の妹を探し出されたのだろうか」と訳し、先例にかなうものとして東宮の妻に麗景殿が選ばれたと解釈している。本稿では前者で解釈し、論文では「東宮以外の男とみずから心を交わしている」と表記した。
- 10 中世王朝物語全集『我が身にたどる姫君 上』(笠間書院、二〇〇九)当該箇所訳。
- 11 今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君6』(桜楓社、一九八三)。
- 12 次の表現が両者の和歌で共通している。
 《麗月夜》「心からかたがた袖を濡らすかなあくとしふる声につけても」とのたまふさま、はかなだちていとをかし。(賢木)
 「年月をなかに隔てて逢坂のさもせきがたく落つる涙か」涙のみせきとめがたき清水にて行き逢ふ道ははやく絶えにき。(若菜)
 《麗景殿》「関守の通さぬ夜半と知りながらなほまどはる逢坂の関」心からうき逢坂の関守は涙のみこそとどめざりけれ」(巻四・二〇七頁)
- 13 金光桂子『我身にたどる姫君』の描く歴史(上)』(『国語国文』第六十九巻第九号、二〇〇〇・九)。
- 14 辛島注7論文。